

マンシュ・ツングース系⁽¹⁾民族における柳崇拝

王 宏 剛・楊 紅

はじめに

1. 調査資料にみられる柳崇拝及びシャーマニズムにおける柳の神話
 - (1) 白樺の神箱における柳の図案と三女神の神偶に関する神話
 - (2) 満州族の柳に関する創世神話
 - (3) 柳の始母神の神話
 2. シャーマニズムの柳祭
 - (1) シャーマニズムの史詩と伝説における柳祭
 - (2) 満州族のトンジャ氏族の柳祭
 - (3) 満州族の柳の女神のフォド祭
 - (4) 他のシャーマニズム祭祀儀礼における柳崇拝
 3. シャーマニズムの祭礼における女戦神と柳の始母神
 4. 古代の「柳を射る」儀式と祭天の儀式
 5. マンシュ・ツングース民族における柳崇拝の習俗
- おわりに

キーワード：マンシュ・ツングース民族、
柳崇拝、シャーマニズム、神話

はじめに

中国の東北地方に居住するマンシュ・ツングース系民族（満州族、シボ族、オロチョン族、エヴェンキ族、ホンジュンなど）の特徴的な宗教であるシャーマニズムにおいては、たくさんの植物が神聖なものとして崇拝されている。その中で、柳が最も重要な聖物の一つである。筆者の王宏剛は、マンシュ・ツングース系民族

文化に関する20年余りのフィールド調査を行い、柳に関するシャーマニズム神話、祭祀儀礼、及び関連する民俗などの系統的な資料を見出した。王は、この柳に関するシャーマニズム神話、祭祀儀礼、民俗などを「柳崇拝」と定義されている。この柳崇拝に、マンシュ・ツングース系民族の古くから伝えられてきた素朴な世界観が見られると考える。

1970年代以前、特に「文化大革命」の最中にあるのは、少数民族の独自性を強調することを避けなければならないために、柳崇拝という文化意義の高い研究課題は、本格的に行われてこなかった。1980年代以降、中国諸民族の伝統文化に関する研究が始まり、やがて盛んな研究の潮流を形成するに至った。ツングース民族の文化に対するフィールド調査が進められるにつれて、柳崇拝に関する資料が相次いで発見され、この研究が重視されるようになった。富育光・王宏剛の『薩満教女神』（1995）の「トーテム・始母神」の章では、柳崇拝について詳しく論述している。他の中国の学者の論著においても柳崇拝に言及しているが、筆者がみたところ、これらは、調査資料が体系的ではなくて、深い論述もなされていない。

本稿では、王宏剛の柳崇拝に関する系統的なフィールド調査及び文献資料を踏まえながら、マンシュ・ツングース系民族における「柳崇

ジュンなどの民族を指している。

(1) マンシュ・ツングース系諸族は、アルタイ語族の満州族、シボ族、オロチョン族、エヴェンキ族、ホン



白樺の神箱における柳葉の図案、王宏剛撮影

拝」という文化の特徴について詳しく分析し、この柳崇拝を形成した文化的な諸要素を考察してみたい。

1. 調査資料にみられる柳崇拝及びシャーマニズムにおける柳の神話

(1) 白樺の神箱における柳の図案と三女神の神偶に関する神話

筆者は、1980年代に満州族文化を調査した時、松花江の川上に居住する満州族の莫哲勒（以下は「莫」と呼ぶ）という家族に秘蔵された白樺の皮で作られた箱（この家族ではこの箱を「神箱」と呼び、筆者も以下では「神箱」という）を精査した。この神箱は、高さ15センチメートル、長さ20センチメートルである。神箱の蓋と底は、柳の葉のような形で、直径は4センチである。この神箱の底に穴が開けてある。神箱の正面には、凹んだ七枚の柳葉の図案が刻まれている。この七枚の柳葉が中心部に集まって、丸い放射状をなし、柳葉の葉絡もはっきりしている。この図案の全体をみると、柳葉は、自然な対称の形ではなく、柳葉で作られた珍しい花の

ようである（写真付）。

莫氏の老人によると、この白樺の皮で作った神箱は、シャーマニズムにおける九天に居住した宇宙を司る三柱の女神のすみかである「金楼神堂」を象徴する。三本の丸木に刻まれた人面の神偶（人形）は、その三柱の女神である。この神偶は、長さが10センチメートルで、顔つきは古風であるが、生き生きとしている。この三柱の女神の目は突き出て、三方向に向いている。この三柱の女神の住処の「金楼神堂」を象徴した白樺の神箱の底に穴をあけているのは、女神が天と地の間で往来でき、宇宙の万物を主宰していることを意味している。女神の神偶は、通常、白樺の神箱に納められて、勝手に触れたり開けたりすることを禁止されている。昔、この莫氏族のシャーマニズム的な祭祀儀礼を行う時、身を清めたシャーマンは、この三柱の女神の神偶の入った神箱を神棚（満州語では「倭什庫」と呼ばれる）の上に置いて、主神として祭った。この神箱の柳葉の図案は、氏族の子孫が柳葉のように繁茂することを象徴している⁽²⁾。

この白樺の皮で作った神箱と神偶によって伝承されてきた神話は、満州族の母系社会が繁栄

(2) 王宏剛・金基浩『満族民俗文化論』、吉林人民出版社

社、1983、382-383頁。

した時期に生じた典型的なシャーマニズム神話である。この神話は、シャーマニズムが母系社会に発生し、発展したことを明らかにするだけでなく、当時の社会状況の諸側面やシャーマニズムの重層的な世界観を反映している。

(2) 満州族の柳に関する創世神話

満州族の古い神話において、宇宙の主神としての天神は、元々、形がなく、水のように流れたり、雲のように浮遊したりしていた。その後、アブカハハ（満州語では、「天の母親、天神」という意味である）女神が天を司る神になった。彼女を最初に具現した像は万物を孕む巨大な女性性器であった。柳が女性性器の象徴であるために、柳が人類や万物を生み出す神話がたくさん生じたのである。

満州族には、次のような起源神話が伝えられている。

大昔、洪水の上に葉っぱのようなものが浮いてきた。これは、波とともに漂っていて、いつまでも沈まない。この葉っぱのようなものはだんだん増えて、「佛多毛」（あるいは「佛佛毛」という）に変わった。この「佛多毛」が、方々に流れていった。この「佛多毛」の中から、人類が誕生した。続いて、草花や樹木が生まれた。鳥獣や魚類などの万物が世に出来た。この「佛多毛」とは一体何であろうか。「佛多毛」は柳葉のことであった⁽³⁾。

この神話は、前述した白樺の神箱の神話と同じく、柳葉が生命を生み出すという意味を含んでいる。柳葉の形が女性性器に似ているので、女性性器の象徴になったのである。柳崇拜は、実際は、女性性器に対する崇拜であった。すなわち、柳崇拜は、女性の生育の能力に対する崇

拝であった。この柳崇拜は、満州族の祖先の「母親は知っているが、父親は知らぬ」という母系社会に生じた重要な文化であった。その背後には、当時の人々の子孫の繁栄の意識が潜んでいた。これは、次第にトーテム崇拜や祖先崇拜に変わっていった。

琿春地区（吉林省）における満州族の喜塔拉という氏族のシャーマニズムの神諭（祭祀儀礼の神歌などを記録する書物）の中には次のような神話が記載されている。

満州族はどうして柳を敬っているのか。元来、アブカハハ女神は、ヤロリ（満州語では「悪神」という意味である）と戦っているうちに、多くの善神が戦死したので、天上に飛んで行くほかなかった。ヤロリは、アブカハハ女神を追いかける途中、彼女の股を掴み、彼女の体を保護していた一握りの柳葉がちぎられた。この柳葉が人間の世界にちらちらと降って来た。それらによって、人類や万物が誕生した。

この神話においても、柳は生命の母体であった。興味深いのは、最古の天神としてのアブカハハという名前である。満州語では、「アブカ」とは、「天」の意味であり、「ハハ」とは、女性という意味であり、満州語で女性の陰部の意味を指す「佛佛」から転じたのである。女性の陰部を表す「佛佛」は、柳葉を意味し、神話の中の「佛多毛」（あるいは「佛佛毛」）と同じ語源に属している。このようにして、柳崇拜は、天神崇拜及び女性崇拜と深く関連していることが推測できる。柳に関する神話の世界は生命の世界であった。

(3) 柳の始母神の神話

清朝時代に、シャーマニズム的神話「佛赫媽媽与烏申闊瑪発」⁽⁴⁾が寧古塔地方（現在の黒龍江省の寧安市）で伝えられていた。その内容は

(3) 汪幼鈴「論満族水神及洪水神話」、『民間文学論壇』、1986年4号、56-57頁。

(4) この神話は金時代に伝えられた。筆者の王宏剛が調査を行った際に、当地の老人の傅英仁によって語り伝

次のとおりである。

大昔、満州族の始母である佛赫媽媽は、長白山の柳から変身した。また、始祖の烏申闊瑪発は、北海の中で天と地下の間に立てた石柱から化けた。佛赫媽媽は、悪魔との闘争の結果、勝利した。その後、彼女は、自分の四対の子供に夫妻を結ばせ、性交の術を授けた。こうして、人間の子孫は綿々と存続してきた。佛赫媽媽はまた、天界の万能の泥と柳を彼らに授け、彼らの模様をまねて、もっとたくさんの人類を誕生させた⁽⁵⁾。

ここで、柳は人類の始母であり、トーテムの意味を帯びようになった。松花江の川上に居住する満州族の石克特立（漢名では「石」をあてる）氏族のシャーマンの神諭では、柳の始母は「佛托媽媽」といわれ、本氏族の始母神として崇められている。神歌には、「石姓の始母を頼むよ。万古の神霊は天を通る」と、「腕前の見事なる佛托媽媽よ、長白山から降臨した」と記載されている⁽⁶⁾。この神歌から、始母神は、氏族の発祥地の長白山に誕生し、非常に古くて神聖なる神であることが分かった。

マンシュー・ツングース民族の古いシャーマニズム的神話では、女神は男神に劣ることなく崇められた。そのために、祖先崇拜は、トーテム崇拜の中に生じたのであり、母系社会の繁栄した時期に発展していったと考えられる。

満州族は約3,000年前に父系社会に入った。男神のアブカエントリ（満州語では「天神」という意味である）は宇宙を司る天神になった。しかし、アブカエントリ天神に関する次のような二つの神話には、依然として母系社会の柳の

崇拜の観念が残されている。

はるかな昔、天と地が誕生したばかりであった。アブカエントリは腰に巻きつけた細い柳葉を何枚か摘み取った。すると、柳葉の上に跳虫、爬虫類、人類が生まれた。その後、大地に人煙があった。現在まで、柳葉の上に小さい緑のこぶが出て、虫がつきがちになるのは、その時から始まる。

この神話の中では、男神がすでに昔の古い女神に取って代わっている。しかし、柳が生命の源とする観念は受け継がれている。

牡丹江流域（黒龍江省）の富察登哈（漢名では「富」をあてる）氏族の神諭には次の神話が記録されている。

大昔、わが祖先の居住地の近くの小川（満州語では「フゥエカンビラ」という）が突然、（現在、黒龍江省境内の鏡泊湖）氾濫し、湖に変った。この氾濫した水で、人類や万物が水浸しになってしまった。アブカエントリ天神が自分の体から擦り落とした垢で作った人類は最後には一人しか残らなかった。その人は洪水の中でもがいて、もう少しで溺れるところであった。その瞬間、水面に、柳の枝が一本流れてきた。彼はその柳の枝を掴んで、助かった。

その後、彼は、柳の枝に乘せられて、その氾濫した水に半分浸されたに入った。この石窟^{せうくつ}の中で、柳の枝は、きれいな女性に化けて、この男と結ばれて子供を生んだ。

この奇妙な神話の中では、柳は氏族の濃いトーテム的色彩を帯びている。それ故に、富氏族は昔から、毎年、盛大な柳祭を行ってきた。柳祭の終了後、その柳の枝は神棚の上の神箱に納め

えられた物語である。この傳英仁という老人は黒龍江省寧安市における満州族の富察氏の名家に出身、当地の有名な民間故事家、2004年11月に亡くなり、享年86歳。

(5)民間故事家の傳英仁が調査した資料を参照。

(6)石氏族の薩満神本に記録した。原文は満州語であり、劉厚生^{リウコウセイ}の翻訳を参照。

られる。翌年、柳祭を行う際には、新しい柳の枝を摘み取り、そのかわりに、シャーマンは神箱に入った古い柳の枝を川の中に送って流す。こうして、年々、柳を祭る儀礼や祖先を祭る儀礼は、満州族の祖先の柳に対するトーテム崇拜として近世に伝えられてきた。

2. シャーマニズムの柳祭

(1) シャーマニズムの史詩と伝説における柳祭

シャーマニズムの英雄史詩「ウプシペン^{ママ}媽媽」(12世紀ごろ)には、東海窩集部族のシャーマニズムの魚祭について次のような記録がある。

祭祀の前に、まず、金風で濾した黄米^{うるあわ}(梗粟)で魚形のもちを作った。それから、川の岸辺の新柳で魚形の神偶を作り始めた。この神偶は、二、三人分の身長ほどの高さがあった。この神偶は、跳んだり、泳いだり、尾を追ったりして、生き生きとしていた。

祭祀が始まる時に、女ハン(罕)王は、体に柳の形の鈴を掛けた。女シャーマンと氏族の人々は、柳葉で作ったスカートを穿いた。子供たちは、柳の枝で編んだ魚形の帽子をかぶった。その帽子の形は、鯉、鯨、飛魚が多かった。女シャーマンは、太鼓を叩いて、魚の女神のモハォエントリに祈禱する。その後、水泳の上手な若い男女たちは、魚形の神偶の中に潜り込んだ。この神偶の鰭や尻尾が動くと、まるで魚が川の中で戯れているようであった。川の中と岸辺は魚と柳だけの世界となった。

この盛大な魚祭は三日間続いていたが、氏族の人々は川の岸辺や小船(満州語は「威呼^{ウフ}」という)に泊まった。柳葉、魚、海老などを食べたり、鹿の血や川水を飲んだりした。このようにして、神聖なる魚の女神は豊漁をもたらすものとみなされた⁽⁷⁾。

長編の英雄伝説の「東海沈冤録」(17世紀ごろ)に、明代の東海嘎忽坦河部の柳祭の盛況が記載されている。その様子を見てみよう。

引き潮が起こったり、川水が涸れたり、疫病が流行ったり、柳の虫害が起こったりするのは、柳の神が邪気におかされて災厄がふりかかろうとする前兆であった。その際には、氏族全体が盛大な柳祭を行うことになった。

部族の女ハンシフリンは、遅しくてきれいな女性を九人か十三人選んだ(女ハンに選ばれた女性は、最も多い時には、三十三人に達した)。これらの女性は、全身が裸であったが、腰のところにのみ、柳葉で編んだスカートを締めて、柳の女神であるフォド媽媽^{ママ}とみなされた。部族の人々は、鹿の新鮮な血を彼女の身体に塗った。これは、柳の女神に神力を与え、災厄を追い払うことを意味した。そして、米で作った酒やきれいな川水を撒き散らした。この柳の女神に変装した踊り子たちは踊りながら歌っていた。部族の人々も唱和した。その間、柳の女神であるフォド媽媽が祭壇に降臨した。すると、女シャーマンは腰の鈴を振り、神の太鼓を叩き始めた。その踊り子たちも同調した。女シャーマンと踊り子たちは、部族の人々のよく活動した山野、川の岸辺、海岸などを歩き回りながら、神歌を歌ったり、踊ったりしていた。至るところが賑やかになってきた。人々は、柳の女神を祭るために女シャーマン一行の通った所に、鹿の血や清水を撒き散らした。こうすると、その所の災厄や疫病も無くなり、平安になった。また、天候も順調になり、大漁になるとみなされた。

この柳祭は数日間も行われた。その間、柳の女神に変装した女性たちは家に戻らず、河の柳で作った筏^{いかだ}や小船に泊まらなければならなかった⁽⁸⁾。古代の神話では、柳の女神は、生命の源である水から誕生したと考えられた。

(7) 富育光『薩満教と神話』、遼寧大学出版社、1990、76頁。

(8) 王宏剛・金基浩『満族民族文化論』吉林人民出版社、1983、387頁。

この柳祭は、柳の女神であるフォド媽媽を祭るほかに、海の女神や魚の女神などを祭った。これらの女神を祭るのは部族の生業と深く関係しているからであった。柳祭の中で、動物（鹿など）の血を柳の神に捧げるのは、柳の女神の生命力や生育の能力をもっと力強く増進するためであった。こうして、柳の女神は、厄除き、邪気払いの神力を得た。また、柳の女神は部族の守護神の役割を備えていた。

筆者は、1984年に、琿春地方に居住する関文海の老人にインタビューした。この老人によると、この部族において、柳祭は、満州国時代（1932～1945）まで行われていた。しかし、その時代の柳祭の目的は雨乞いであった。選ばれた踊り子たちは衣装を着始めるようになったが、この柳祭に、古代の柳祭の影がいくつかも観察される。

(2) 満州族のトンジャ氏族の柳祭

満州族のトンジャ氏族の神本（祭祀記事や神歌を記載するもの）によると、この氏族の祖先は長白山のトンジャ江（現在の吉林省境内の渾江）の流域に居住した。この場所をホト（満州語で「城」という意味である）と呼ばれた。この城の近所に大きな柳の森林があった。そこがトンジャ氏族の柳祭を行う聖地であった。この川の岸辺の柳は、トンジャ氏族の守護神として祭られた。すなわち、この柳は、トンジャ氏族にとってトーテムの始母神であるフォド媽媽であった。この柳祭から、珍しくて美しい舞踊が伝えられている。また、柳葉に包まれたボボ（饅頭）、柳茶、柳の材料で作った装飾品、器物なども現在まで残されている。トンジャ氏族の柳祭の段取りは以下のとおりである。

まず、水で身を清めたシャーマンは、針鼠とかげか蜥蜴で柳祭を行う聖地を占う。聖地が決まったら、祭壇を設け始める。祭壇の中央に位置した一本の柳が神樹と選ばれる。また、柳木で神案

（机のような形）を作る。その神案の上に柳の神、虎の神、鷹の神、狩猟の神、水の神、方位の神などの神偶やその他の聖物を置く。神案の前には猪などの供物が供えられる。

① 狩猟の神を祭る祭礼

柳祭を始めるにあたって、主祭のシャーマンは他のシャーマンたちを率い、柳に向かって跪き、神歌を唱える。それから、シャーマンたちは、柳の上に吉祥の象徴の聖物である神偶、五色の石、鏡（銅で作られた）などを掛ける。酋長（満州語で「フロンダ」という）や族長（満州語で「ムコンダ」という）は人々を率い、神樹に向かって叩頭する。

主祭のシャーマンは、祭壇の前で神歌を吟唱しつづける。だんだん激しくなる太鼓のリズムの中で、狩猟の神のバンダマファがシャーマンの体に憑依すると、シャーマンは、獣の仮面をかぶって踊りだす。シャーマンは、九天の神鹿に乗った狩猟の神が降臨する様子をまねて踊り、踊りの動作が速くなっていく。弓を射たり、叫んだりするこの踊りの様子は、狩猟の神の無敵の弓術やその威力を象徴している。

狩猟の神を送る神歌を歌って、この祭礼は終了する。

② 虎の神を祭る祭礼

狩猟の神を送った後、虎の神が祭壇に降臨する。シャーマンは虎の神を迎える踊りを舞い始める。このシャーマンは、顔をあげて周囲を見回したり、体を揺り動かしたり、跳躍したり、叫んだりするといった舞踊の動作で、虎の神の勇猛な力を表す。最後に、虎の神は口の中に供物の肉を銜くわえて離れていく。

③ 鷹の神と猪の神を祭る祭礼

シャーマンは、数字の「八」を描くように一歩一歩踏み出し、祭壇に向かっていく。この踊りは、鷹の神のダイミン女神が人間に降臨したことを意味する。そこで、シャーマンは、鷹の動作をまねる踊りを舞い始める。シャーマンは、

この踊りが終了した後、神歌を唱えて、鷹の神を天上に送る。

その後、猪の神が祭壇に降りてくる。主祭のシャーマンとその助手たちは猪の神を迎える踊りを舞いだす。シャーマンたちは、急に跳んだり、踊ったりする動作で、猪の神が四匹の子猪を率いて走ってきたことを表現する。シャーマンが鼻先でゆかをほじくる動作は、道を切り開く意味を持つ。続いて、シャーマンが柳を叩いたり、石を押したりして踊ると、部族の人々は歓呼をする。この踊りの動作は、柳の女神のフォドが祭壇に降りてくる前兆である。猪の神は、道を切り開く大きな力を持つ神で、柳の女神の前衛の使者のためにそれを行う。

④柳の女神を祭る祭礼

シャーマンは、柳の女神フォド媽媽を迎える神歌を吟唱する。その後、シャーマンの助手は、このシャーマンに帽子（中国語では「神帽」と呼ぶ）をかぶらせて、柳葉で作ったマントを着せる。すると、シャーマンは、太鼓を叩きながら軽快に踊りだす。四人の男女の若いシャーマンも踊り始める。この四人の若いシャーマンたちは、両手に新柳の枝を持って、太鼓のリズムに乗せて、両手を高く上げたり、左右に上げたり閉じたり、しゃがんで回転して柳の枝をゆかに払ったりする。それから、彼らは、立ち上がって踊りだす。その間、部族の人々は、跪いてその柳の枝のお払いを喜んで受ける。この舞踊は、人々に生命を授けた柳の女神の懷に回帰することを表現している。

シャーマンは、踊っているうちに、口から人々に向けて水を噴き出す。これは、柳の始母神が人間に新しい生命の水をもたらすことを表している。シャーマンは、踊りながら、山の石窟に向かい、ここで、石室を清める儀式を行う。その後、氏族の女性にお腹を按摩してやる。これは、女性に早めに子供を生ませるという意味がある。

また、シャーマンは、踊りながら、川の岸辺や村に向かう。シャーマンは、清水か柳で刻んだ人形を若い男女に贈り、彼らに将来、健康で武勇の赤ちゃんを産ませるようにする。最後に、シャーマンは、村の人々の住んだ部屋に入って、子供のゆりかごの上に柳の枝、多彩な布切れ、神偶などを掛けて、子供の立派な成長を祈願する。これで、柳の女神のフォド媽媽を祭る儀礼は終わる。

⑤他の神々を祭る祭礼

柳の女神を送った後、シャーマンと人々はしばらく休憩して、東方の方位の女神を迎える。続いて、柳の王のフォドハハという古い神を迎える。この神は天地と同じ寿命を持った古い神である。部族の人々は、シャーマンが踊っているうちに、柳の王であるフォドハハを模した柳の切り株を運んで、祭壇の前に置く。シャーマンたちがそれを囲んで踊る。それから、人々は、柳の切り株の上に掛けられた吉祥の象徴の聖物を家に持ち帰る。人々は、柳の切り株を囲んで踊った後、柳の王のフォドハハを、村を見下ろさせるように丘へ送る。柳の王であるフォドハハは、柳の女神フォドママと同じく、村を守る神である。

シャーマンは、天然痘の女神及び舞踊の女神であるマクシンを迎える時に、手に鈴を持ち、祭壇の前で踊り、つづいて、ほかのシャーマンたちや部族の人々も踊り出す。祭壇はまるで踊りの海ようになる。

最後に祭られる神は歌の女神ウシュンママである。シャーマンは、白鳥の羽で作った帽子をかぶって、多彩な羽で編んだ服を着て、軽快な舞踊とともに、声をあげて歌い始める。この神歌の中で、歌の女神ウシュンママの素晴らしい歌声を称えたり、柳の女神が新しい生命をもたらすことを褒め称えたり、春の到来を唱えたり、部落の幸福と繁栄を祈ったりする。部落の人々はシャーマンに唱和する。軽快な歌声や舞踊の

中で、神々を祭る柳祭が終了する。

柳祭が終わると、人々は知恵比べの娯楽を行う。茶碗を飛ばしたり、川を渡ったり、柳の森を通ったり、水を奪ったりする。昔は、柳祭を行った後に、野合（男女が婚儀を経ずに通ずること）の風俗もあったという⁽⁹⁾。

(3) 満州族の柳の女神のフォド媽媽祭

乾隆王朝時代（1747）から、満州族の民間においては、殆どの氏族の固有の古いトーテムの神、動物の神、祖先の英雄の神々を祭るシャーマニズムの祭祀儀礼が禁止された。その代わりに、宮廷の統一の祭祀の様式によって、簡素化された儀礼を「家祭」と呼ぶ。しかし、中国の東北の僻地に居住した尼瑪察氏（漢名では「楊」をあてる）、奚赫特里氏（漢名では「奚」をあてる）、烏扎拉氏（漢名では「吳」をあてる）などの少数の氏族では、なお氏族自身の固有の古い神祇を信奉して祭祀してきた儀礼を「野祭」と呼ぶ。これらの氏族は「線香が絶えぬ氏族」と呼ばれた。この「野祭」の祭礼の中には「家祭」も含まれている。

この家祭と野祭の祭礼は1960年代まで併存されていた。注目すべきは、この家祭と野祭において、柳の女神であるフォド媽媽祭という重要な祭礼が保持されてきたことである。満州語の方言によると、フォド（佛多）という言葉は、フォトォ（佛托）、フォド（佛朵）フォドゥ（佛都）、フォリ（佛里）、ワリ（瓦里）などの呼び方もある。これらの呼称が異なるものの、「柳」あるいは「柳の枝」という同じ意味を表す。

フォド媽媽とは、柳の始母神という意味であった。その具体像は二つある。一つは、裸体の神偶であり、そのお腹の下部に刻んだひし形の符号が、女性の陰部を象徴している。もう一つは、

黄色か白色の布で作った「媽媽袋」であった。その袋は、上部が尖っていて、下部が丸い女性性器のような形をしている。媽媽袋は、ふだん、神棚の下側に置かれている。その媽媽袋の中に「子孫繩」（一般には「索線」と呼ばれる）という紐が入っている。この子孫繩の上に、子孫を表した小さい弓矢や多彩な布切れなどがつけられている。子孫繩は、平日には媽媽袋の中に納められているが、これは、子孫が母親のお腹にいるということを暗示している。

柳祭は地方によってやや異なっているが、儀礼の段取りは次のとおりである。

祭祀が始まる時、シャーマンは、西のオンドルの上に供えた神棚（一般には、「祖宗板」という）の下に置いた媽媽袋の中から、子孫繩を取り出す。一方の端は神棚の支脚に結び、もう一方の端は、門口の柳の枝に結びつけた。シャーマンはその子孫繩に掛けた多彩な布切れを子供の首筋に一回り巻きつける。子供がいない時には、その儀礼を受けるべき子供の母親がこの布切れを受領する。この布切れは、男が左で女が右であるという慣習に従い、その子供の母親の母指に巻きつけられて、家に持ち帰って、次の柳祭まで、神棚の上に供えられる。子供はこの柳の女神であるフォド媽媽の守護の下で、すくすくと成長していくのである。門口に立てられた柳は神樹の象徴である。満州族の子孫が枝や葉が茂った柳のように繁栄や隆盛するという意味がある。

満州族のもう一つの祭天（「祭杆^{ジガン}」とも呼ぶ）という儀礼では、シャーマンは、弓矢（一端に馬の剛毛がついていた）を持って、柳の周りを三回回った後、床に米で作られた酒を撒く。この儀式が終わると、氏族の子供たちは柳の枝に掛けられた「水団子」（もち）を奪い合って食べる。この柳と水団子は子孫がとても多いこと

(9) 富育光・王宏剛「論開發長白山満族古文化資源的基礎及前景」、『長白山与満族文化』、吉林文史出版社、

1998、58-60頁。

のたとえである⁽¹⁰⁾。

上述の満州族の民間の家祭と野祭における柳祭と祭天という儀礼は、女性の生育、子供の健康、氏族の子孫の繁栄の祈願と深く関連している。特に、前者の柳祭の儀礼は満州族の各氏族の中で広く見られる。

清朝の宮廷の「堂子祭」という祭礼では、そうした盛大な柳祭が行われていた。しかし、宮廷の堂子祭の中では、フォド媽媽という呼称は、「佛里佛多鄂漠錫媽媽」という正式の名称となった。この呼び名には、「柳、始母、子孫の母親」という三つの意味が含まれている。後者二つの呼称は、満州族の早期のシャーマニズムの世界観の変化の影響がみられる。宮廷の堂子祭は、子供の平安を守るために柳の女神を祭る儀礼である。これは、前述の民間の柳祭の趣旨に近かった。

ここで、柳は、女性の性器の崇拜→トーテム崇拜→始祖崇拜→子供の母親といった変遷のプロセスを経て、満州族の各氏族に広く祭られる重要な女神になった。古い歴史を持つ柳の神話と盛大な柳祭は、満州族の人々の永遠の世界観を表している。柳崇拜には、満州族の人々が長く栄えることへの祝福や祈願が含まれている。柳崇拜が長期にわたって存続してきたゆえんである。

(4) 他のシャーマニズム祭祀儀礼における柳崇拜

満州族の柳崇拜はほかのシャーマニズムの祭祀儀礼に深い影響を及ぼしている。

①神樹祭

琿春（吉林省）地方の郎、那、関などの満州族の氏族においては、新中国の成立後（1949）まで、古い神樹祭が行われている。

祭祀の際には、シャーマンは高い柳を神樹と選んで、その神樹の下で火祭を行う。祭礼の中で、幾つかの古い女神は重要な地位を占めている⁽¹¹⁾。

②ホジェ族の鹿神祭

ホジェ族の重要なシャーマニズム儀礼である鹿神祭においては、柳の輪を通る儀式がある。この儀式の中で、シャーマンは、柳の枝を半円形の輪に曲げる。まず、シャーマン自身は、子供が縄跳びをするように、三回跳ぶ。

その次に、シャーマンの家族、ほかの人々が順番に、一人ずつその柳の輪を三回通る。通り過ぎた人は、神歌を歌わなければならない。この柳の輪を通り過ぎたら、神が佑助できる範囲に入って、災厄に侵されないことを意味する。柳は、邪気払いの超自然力があるものとみなされている⁽¹²⁾。

③オロチョン族の病気治療の儀礼

オロチョン族では、新シャーマンが老シャーマンにシャーマニズムの術（漢語では「跳神」という）を学ぶ時に、大きな「斜人柱」（テント）を建てる。「斜人柱」の中央には、二本の柳の柱をまっすぐに立てなければならない。二本の柳の柱の間で、地面から一尺あまりの高さのところに、横に一本の小さな柱（柳木）をくくりつける。この横木は新シャーマンが神を迎えて神と交わる神聖な物になる。

オロチョン族の病気治療の儀式では、「察爾巴来欽」（チャアルパライチン）という神職者が存在した。「察爾巴来欽」は、神を祭ることを専門としているが、専門の法器を持たず、家で神を祭る時に彼を呼んで神を祭ってもらう。

病気治療の儀式を行う時、「察爾巴来欽」は、祭壇に跪き、右手に柳の枝を持って祈祷文を唱

(10) 1985年に、筆者の王宏剛と研究グループは吉林省烏拉街で「満族瓜爾佳氏薩滿祭祀」という特別作品を撮影した。

(11) この祭礼は、筆者の王宏剛が吉林省の琿春県の三家

子郷、楊泡郷で調査した資料である。

(12) 凌純声『松花江下游的赫哲族』、南京版、1934、73-74頁。

える。祈祷が済むと、「察爾巴来欽」は、柳の枝についた葉を一枚一枚摘み取って前方に投げる。これは、病人は病気が早く治ることを表す。柳の神は人間に新しい生命力を授け、病気を防ぐ能力をもたらす⁽¹³⁾。

3. シャーマニズムの祭礼における女戦神と柳の始母神

満州族の尼瑪察氏（漢名では「楊」をあてる）、石克特立（漢名では「石」をあてる）の野祭においては、女戦神である奥朶媽媽（オドママ）が祭られている。「奥朶」とは、満州語では、弓を射る時に的確であり、かつ馬に乗る時に穩やかであるという意味を持つ。石氏族では、この女神を祭る時に、次のような神歌を唱える。

オド媽媽を頼むよ。

一列の供物を供えて捧げる。

オド媽媽は軍営にいらっしゃる。

主人を救うために出征した。

二匹の青色の馬に乗り、

馬は水面に現れた蛟（みずち）のように

行程を急ぐために一刻も止めぬ。

目的地に着いて主人が助かった。

一日に千里の道を走った。

一夜に八百里の道を走った。

急いで前へと走っているよ。

遠くへ影が見えなくなった。

オド媽媽は度量が大きくて鷹揚であり、

美名が永遠に伝えられている⁽¹⁴⁾。

この神歌には、昼に千里、夜に八百里走った二匹の馬に乗る英雄の女神が現されている。

満州族のシャーマニズムの創世神話である「天宮大戦」の中ではこの女神の経歴が次のように記述されている。

オド媽媽は、元々、アブカハハ女神の三番目

の侍女であり、オドシ（満州語では「少女」という意味である）と言い、七色の馬を飼っていた。天宮の大戦では、アブカハハ女神は悪神ヤロリを追いかけることができなかった。そこで、オドシは巧妙な計略をめぐらした。彼女は、草で編んだ馬を悪神ヤロリに乗せさせた。悪神ヤロリは手足がその草に縛られ、そのために、アブカハハ女神は悪神ヤロリに勝ち取ったのである。

もう一つのオド媽媽に関する伝説は次の通りである。

悪神ヤロリは、アブカハハ女神が美しいので、彼女をからかった。アブカハハ女神は、毎日、悪神ヤロリの大きな頭を見ていたので、眩暈がするようになった。そこで、アブカハハ女神は侍女たちに悪神ヤロリを追い払わせた。

まず、一番目の侍女である鵲は、鳴き声で悪神ヤロリを駆除した。しかし、悪神ヤロリはこの鳴き声が聞こえないように、いくつかの山で自分の耳をおおったので、この策略は失敗した。

続いて、二番目の侍女の針鼠は、自分の体から光った光で悪神ヤロリの目を刺したが、悪神ヤロリは、白い霧で目を遮った。この策略も失敗した。

三番目の侍女であるオドシ（オド媽媽）は、数匹の七色の馬を悪神ヤロリの目の中に放って彼を追い払った。しかし、アブカハハは、七色の馬がいなくなったことを怒り、オドシ女神を追放した。それ以降、オドシ女神は、長い間、アブカハハ女神に近よれなかった。そのために、オドシ女神の神偶は主神の母屋に供えられなかった。その後、アブカハハ女神は、オドシ女神が懐かしくなって彼女を召還し、戦神に封じた。

この神話では、オドシ女神は馬を飼う女神なので、遊牧時代の満州族が馬を放牧する時に、

(13)『オロチョン族社会歴史調査』、内蒙古人民出版社、1987、136頁。

(14)この神歌はシャーマンの神本に記載されている。原文は満州語であり、劉厚生訳を参照。

この女神を祭っていた。また、オドシ女神の神偶は厨房に置かれたので、家事を司る女神としても崇められていた。オドシ女神は、厨房の事々、針仕事、手仕事を手助けし、満州族の女性に家事を切り盛りする腕前や知恵を身につけさせると信じられた⁽¹⁵⁾。

奥朵媽媽は、天神の系統に属し、悪神ヤロリに勝ったために戦神になった。また、彼女は、牧馬の神と知恵の神をも兼ねていた。筆者の観察でも、満州族の野祭の祭壇に、奥朵媽媽は確かに厨房に供えられていた。この二匹の馬に乗った英雄の女神の神偶は、柳の下に繋がれていた。これはなぜであろうか。調査の際に、筆者がこの問題について大シャーマンの楊世昌⁽¹⁶⁾に聞いたところ、これは、昔から伝えられてきたしきたりであると答えてくれた。ほかの満州族の少なからぬ氏族にも、この古い風習が残されている。

奥朵媽媽は、部族の出征の成功や平安を守る神である。同時に、彼女は知恵の女神でもある。しかし、このような英雄の女神であっても、柳の始母神の助けがあってこそ無敵の神威を持つようになったのである。つまり、女神も母親の力を離れられないのである。

4. 古代の「柳を射る」儀式と祭天の儀式

史書においても、マンシュ・ツングース系民族の祖先の柳祭に関して少なくない記述がある。

例えば、『遼史』の中には、「柳を射る」儀式や「瑟瑟礼」の記述が数十箇所ある。柳祭に伴う宴会の様子や賞の授受などの詳細も記述されている。

これらの記述では、「柳を射る」儀式は「瑟

瑟瑟礼」、「祈雨射柳」、「射柳」などと呼ばれた。柳祭は、二月から七月の間に行われるが、四、五、六月のほうが多かった。柳祭を行う前に、吉日が占われる。位の高い大臣が供物を準備した。柳祭を行う時に、皇帝と大臣は儀礼専用の服装で出席した。地方の官員も集まった。儀礼が終わった後は、国事を議論した。後晋の朝廷は使者を遣わし、遼の皇帝に馬や鞍を献上した。

『大金国志』三十九巻には、女真人は元日に太陽を拝んで祝ったが、五月五日には、柳を射たり、天を祭る儀礼を行った、と記述されている。ここには、射る儀式と祭天の儀式とはどういう関係があるかということについては、詳しく述べられていない。しかし、シャーマニズムの史詩「ウプシベン媽媽」の中における古代の柳祭の盛況では、柳を射る儀式と祭天儀式との関係が詳しく描かれている。

元来、シャーマニズムの史詩の中のウプシベン媽媽は、東海^{ウシヘン}の海辺で魚の皮を煮る啞女であったが、その後、七百の部落を統轄した女ハン（女王）になった。彼女は、その女ハンになる前に次のような「柳を射る」儀式を行った。

女のシャーマンは山へト占で選ばれた古くて高い神樹の上にある九叉の枝を取りに行った。この九叉の柳の枝はアブカハハ天神を象徴し、「九王柳」と呼ばれた。女シャーマンは、馬に乗って、迅速にこの柳の枝を祭壇の前に送ってきた。この「九王柳」という柳の枝が祭壇の周りにある九本の高い樹の梢にくくりつけられた。

部族の人々は、その九叉の柳の枝に向かって礼拝し、供物を捧げた。この時、ウプシベン媽媽は、白い駿馬に乗り、風のように走ってきて、その九叉の柳の枝を射当てた。人々は喜びし、アブカハハ天神に選ばれた女ハンの誕生を祝った。

(15) 富育光・王宏剛『薩滿教女神』遼寧人民出版社、1995、211-212頁。

(16) 楊世昌は、吉林省九台市莽卡郷の農民であり、楊氏

族の有名な大シャーマンである。彼は1987年に亡くなった。享年は78歳であった。

女ハンになったウプシペン媽媽は、広い東海の地方をうまく統治した。ウプシペン媽媽に統治された地域は平和の楽園となった。これ以後、各部落の王を選定する時、必ず、柳を射て、神に選ばれるという儀式が伝えられるようになった⁽¹⁷⁾。

さて、柳を射る儀式からは二つのことが分かる。一つは、柳はアブカハハ天神を象徴しているということである。もう一つは、柳を射るのは天神の意思を人間に伝達することであるということである。言い換えれば、部族の人々は柳を射ることを通じて、神の意思を確認するのである。

シャーマニズムの史詩「ウプシペン媽媽」の中に、面白いエピソードがある。部族の人々は、女ハンに射られた「九王柳」を奪い合って、家へ持ち帰って煮て食べた。これによって、男は、虎や豹のように勇猛になり、強い生殖の能力をもち、女は、新しいハン王や勇士を生むことができると思われた⁽¹⁸⁾。この風習は前述した女性の生殖崇拜を体現したものである。

では、人々はなぜその天神を象徴した「九王柳」を食べるのだろうか。イギリスの人類学者のジョージ・フレーザーは、『金枝篇』⁽¹⁹⁾の中でこの謎を解明した。彼は、世界の少なからぬ民族で、神の体あるいは神を象徴した聖物を食べることを通じて神の力を得るという事例が多いと主張している。満州族において、柳を食べる習俗はこのような文化の働きの表れである。

5. マンシュー・ツングース民族に おける柳崇拜の習俗

満州族の祖先の女真人は、柳木を氏族の刑具

として祠堂（祖先の霊を祭る所）に供えて、不孝の子孫を処罰した。金時代になって、刑務を管理する官吏も柳木を使って犯人をむち打った。清朝時代には、満州族において、氏族の人々が家法を違反すると、族長は、祖先の族譜あるいは肖像の前で、柳の枝か柳の板でその人をむち打った。これは、祖先の象徴としての柳が大きな権威を持っていたことを意味する。

女真人は嫁入りする時に、柳葉の茎を食べる習俗があった。また、柳葉で作ったお茶で賓客をもてなした。このような習俗も後世の満州族に伝えられた。

昔の満州族は、赤ちゃんが誕生すると、門口の前に柳の枝と小さい弓矢をかけた。これは、吉祥を象徴している。子供は弓術を学ぶ時も、柳の矢を使うことがあった。

『北平風俗類徴』⁽²⁰⁾には、「清明の際、女性、子供は新柳の輪を首に飾った。……」と記されている。また、「清明の時、柳を髪の上に挿した」とも書かれている。この中に、「子供は墓参りに行く時、墓の上に柳の枝（満州語は「フォド」という）をたくさん挿した」とも書かれている。これらの風習は現在の満州族にもよく見られる。

黒竜江省の満州族、ホジェ族などの「祈子儀式」（子授けを祈願する儀式）は、幼児を守る神の「送子娘娘」の絵の後ろに柳の枝を立てて、子供の魂を預かる場所とみなす。

満州族では、柳崇拜から変形した娯楽活動も広く行われた。『金史・礼志八・拜天』には、「柳を射て、ボールを投げるのは遼時代の遊びであった。それは、金時代にも流行した。柳祭が終了すると、柳の枝を立てたコートで、人々は二列に並ぶ。地位の高低によって、人々はそ

(17)同注(15)。

(18)『オロチョン族社会歴史調査』、内蒙古人民出版社、1985、94頁、『エヴェンキ族社会歴史調査』、内蒙古人民出版社、1987、83頁。

(19)徐与新等翻訳、中国民間文芸出版社、1987、695—696頁。

(20)李家瑞、商務印刷出版社、1937。

の技を演ずる。皮を剥けた柳の枝で的を作る。一人は馬に乗って先導し、後ろについた人は馬に乗って羽がついてない弓矢でその柳の枝を射る。射に当たった、かつその柳の的を手の中に入れ、馬に乗って行った者は優勝する。射に当たった、柳の的を手に入れなかった者が次いだ…」と柳に関する娯楽が記述されている。

長編の英雄伝説の「両世罕王伝」(16世紀ごろ)には、清朝の初期の柳に関する娯楽活動が記録されている。満州族の建州女真部のハン王の王杲は、ウラ部を訪ねた時に、少女たちが柳の城を走るといふゲームを見かけた。

この柳の城を走るといふゲームでは、チーム毎に、それぞれ、美しい女性を柳王(「虎頭罕王」といい、虎の皮で作ったコートを着て、頭に柳葉の輪を挿し、腰に柳葉のスカートを巻きつけた)に選ぶ。両者は、柳の枝でゴールを作る。そのゴールの前、後ろ、右、左の四方位を一人ずつで守る。笛を吹き鳴らすと、双方のメンバーは八方手を尽くして相手の「柳王」を奪おうとし、同時に、自分の「柳王」が敵方に奪われないように工夫する。「柳王」が敵方のチームに奪われると、ゲームは終了する。

ハン王の王杲は、このゲームを見て大喜びした。このゲームは、満州族の建州の各部族で流行ったが、清朝の半ばに廃れていった。

柳を射る儀式と祭天の儀式は、元来、シャーマニズムの祭祀儀礼であったが、その後、だんだん、娯楽の活動へと変わった。しかしながら、この娯楽の活動の中にも満州族の柳崇拜が含まれていた。

かつて、森林に生活したオロチョン族、エヴェンキ族の人々は、獣を捕獲できなかった時に、柳の枝で作ったノロ、鹿などの形の的に向かって、芯を抜いた銃弾で射撃したが、まるで実際の狩猟で獣を捕獲したように、「当たった。当

たった」と大声で叫ぶ。そして、仮の捕獲物を殺して内臓を取る動作を真似る。彼らは、このことで、実際に捕獲物を狩ることができると思じた。これは、柳の神に狩猟の豊穡を祈願する意味があった⁽²¹⁾。

おわりに

なぜ、マンシュ・ツングース民族の中で柳崇拜が盛んなのだろうか。柳は世界に広く見られる植物である。中国の広大な地域に、柳が多く分布しているが、マンシュ・ツングース民族のみに、柳の崇拜が継承されてきた。この柳崇拜という文化は、様々な背景の下で形成されたのである。そこで、柳崇拜の形成の要素について分析してみよう。

- ① マンシュ・ツングース民族の共同体は、ほぼ17世紀前後に形成されたが、経済、政治、文化などの発展は、不均衡の状態にとどまった。そのために、辺鄙な所に居住した部落や氏族は、長期間にわたって母系社会のままであった。このことによって、柳崇拜をはじめとするシャーマニズム文化が存続できたのである。
- ② 中国の東北地方は土地が広くて人口が少ないために、マンシュ・ツングース系の民族は、自身の存続の問題を重視している。そこで、古くから伝えられてきた生殖崇拜—柳崇拜はその社会の価値を失わなかった。現在の文明社会においても、柳崇拜というシャーマニズム文化が新鮮な生命力を保っているのである。
- ③ 中国の北方では、多くの河や湖があるが、冬が長くて厳しい。そのために井戸を掘って水を汲むことは南方よりずっと困難である。マンシュ・ツングース系民族は、か

(21)同注(18)。

つて、「水源を追って居住する」という猟漁生活を暮らしていた。水源を探すのは人々の生存に必要な条件であった。柳は水の源を意味するので、水の象徴となった。水は、部族の生存にとって重要な生命の源である。ある意味では、シャーマニズムの盛大で神秘的な火祭は、北方民族の祖先が厳寒を征服した誇りを反映したが、これに対して、柳崇拜は、マンシュ・ツングース系民族が水源を発見した歓喜を表現していた。

- ④ 柳崇拜を形成したもう一つの原因は、柳の実用性を持っているのである。柳は多種多様の病気を治療する良薬である。陶弘景の医書に「柳葉で煮た汁が痘瘡を治療した」と記載されている⁽²²⁾。明朝の李時珍の『本草綱目』（1578）には、「柳の根部は天然痘、婦人病を治した。酒で煮た汁をけがした皮膚に塗って、痛みを止めたり、腫れを引かせたりした」と書かれている。マンシュ・ツングース系民族の祖先は、柳葉で、狩猟の時に怪我した傷口や婦人病を治療したこ

とがある。

また、柳は重要な食物である。柳茶は賓客をもてなすのに重要なものである。柳の皮は衣服を作ることができるし、かごのような物品、矢や猟具などを作ることにもできる。柳の実用性は、マンシュ・ツングース系の民族の柳崇拜というシャーマニズム的世界観を強化した。

以上の歴史、自然、社会などといった複雑な要素が、マンシュ・ツングース民族の柳崇拜というシャーマニズム文化を形成した。

参考文献

- 富育光・王宏剛 1995『薩滿教女神』遼寧人民出版社
王宏剛・于国華 2002『満族薩滿教』台湾東大図書
王宏剛等 2002『薩滿教舞蹈及其特徵』遼寧大学出版社
王宏剛・于曉飛 2003『大漠神韻—神秘的薩滿北方文化』四川文芸出版社

(22)陶弘景（465－536）は、南朝時代の道教の思想家、

医学家であり、『本草経集注』などを著した。